

稱讃 二五五号

二〇二四年三月一日発行

発行 浄土真宗本願寺派 稱讃 寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

HP shousanji.com

二〇二三年度 稱讃寺門信徒会費 6千円
二〇二三年度 ご遺骨一時預かり 5千円
永代納骨の積立金 5千円

右記、ご未納の方は、稱讃寺までご連絡ください。

どの方向に心でさがし求めてみても、自分よりもさらに愛しいものをどこにも見出さなかった。そのように、他の人々にとっても、それぞれの自己が愛しいのである。それ故に自己を愛する人は、他人を害してはならない。

『ブッダ神々との対話 サンユッタニカーヤ』

中村元氏訳

「かれらもわたくしと同様であり、わたくしもかれらと同様である」と思つて、わが身に引きくらべて、(生きものを)殺してはならぬ。また他人をして殺させてはならぬ。

『ブッダのことば―スッタニパーター』

中村元氏訳



「人間にとって最も大切なものが主體的な自己を生きる自分自身であるならば、他者からその他者自身に対するのとまったく同じように尊重されることは、人間にとって最も「かけがえないこと」になる。言い換えれば、他者から「そこに自分と同じ人間がいる」とみとめられることこそが、他者との関係性、縁起の世界の

中でしか生きることのできない人間にとっては、真の「人間の尊厳」を現成させる唯一の生き方と言えるのではないだろうか。」(『生死の仏教学』木村文輝氏著)と言う。

お釈迦さまは、「誰もが、最も自分が愛しいと考える。そう思うことは、間違いではないが他の人も、最も自分が愛しいと思っていることを知らなければならぬ」とも仰いました。

きっと、誰もが「そこに自分と同じ人間がいる」と心得るところに、平和な社会があり、それを目指されたのかもしれない。世界中の国々のリーダーの方々が、「そこに自分と同じ人間がいる」と、いつも心に留めておいてくれたら、きっと、戦争とかなかったのだと思うが、人類史上、無くなつたことなどありません。自分の心に振り向けると、いつの間にか「自己中心」な心になっています。

だからこそ「浄土の教え」が必然と起つたのだと思う。お釈迦さまがこの世に出て来られたのは、阿弥陀さまのご本願を私たちに教えるためであると親鸞聖人は(お正信偈に「如来所以興出世 唯説弥陀本願海」)説かれました。

稱讃寺

春季彼岸会法要のご案内

〈日時〉

三月十七日(日)午後二時より

〈日程〉

一四:〇〇 おつとめ

『御本典作法』

・お焼香

・表白

・『新制 御本典作法』

・正信念仏偈(和讃譜)

・念仏 十一句

・伽陀回向

・恩徳讃

一四:五〇 法話(住職)

一五:三〇 茶話会

一六:〇〇 解散

※前日の十六日は、「のんのん法話会」です。連続になりますが、どちらかでも、お参りください。

※三月二十日(木)はお中日ですが、住職は栃木の正浄寺さまのお彼岸法要のご法座に終日出講いたしておりますことお知らせ致します

東京教区東組 親鸞聖人御誕生850年 立教開宗800年慶讃法要



この度の東組親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年慶讃法要は、「親鸞聖人の説き示してくださった浄土真宗の教えに出遇うことがなければ、今の私はあり得なかったという聖人への感謝と、その教えに出遇えたことの喜びを込めて、聖人のご誕生を祝い、『立教開宗』に感謝する」法要です。50年に一度のご勝縁にお参りいたしましょう。詳しくは所属寺のご住職にお尋ねください。



永稱寺マップ

法要日時 : 2024(令和6)年6月1日(土)
午後1時30分より(受付午後1時)
記念講演 : 今井雅晴氏『立教開宗について』
会 所 : 永 稱 寺
住 所 : 東京都台東区根岸3-12-44

※午後3時30分頃終了予定

「築地本願寺親鸞聖人御誕生八五〇年・立教開宗八〇〇年慶讃法要」は、四月二十七日(土)速夜法要に参拝いたします。現在、二十七日速夜法要参拝予定の申込が東京教区内で五〇〇名となっているようです。稱讃寺では、三月一日に九名で申し込みました。未だの方は、ご連絡ください。尚、ご懇志の記念品は、まだオリジナル傘が届いておりません。揃った段階で送らせていただきますので、もうしばらくお待ちください。

東組 親鸞聖人御誕生八五〇年・立教開宗八〇〇年慶讃法要

〈記念講演〉

今井雅晴師 『立教開宗について』

(筑波大学名誉教授・東国真宗研究所所長)

・大変貴重なお話を聴かせていただけます。

特集 金子大榮師の「領解」②

「往生と成仏」②

大乘仏教とは何か、大乘仏教はいわゆる原始教団における精神王国であります。釈尊によって説かれた四諦八正道の教えというものは、精神王国を建てるのが根本的な願いであったのだといつてよいと思います。釈尊の説法を転法輪という、転法輪という言葉は、何時頃からのものか知らないが、古い言葉だと思います。法輪を転ずると申すのは、法輪王―四海を統一する王―が御車にのって津々浦々を巡視せられるところからで、その世間の王と同じように、精神世界の王、如来即ち法王也で、法王としてのご説法が転法輪であります。その言葉をもって釈尊の説法をあらわさんとしたのであります。そこに精神王国ということがあったのであります。又三法印ということがあります、あの三法印とは三つの旗印だということで、三つの幢、諸行無常・諸法無我・涅槃寂靜、この旗印が仏陀釈尊の説法であるということになれば、これも又精神王国の旗印であるといつてよいのであります。

今も印度にあるらしい、婆羅門・刹帝利・吠舍・首陀羅の四姓の平等ということを世間において、釈尊でもいえなかったでしょう。何か、余程階級制度のむつかしいものがあつたようであります。しかし、精神王国においては、それをいわれた。すなわち、どの階級に属そうとも、出家して教団に入ったからは、先なるものは長老である、といった形であります。だから

「この地上において、精神王国を建てんとしたのが、釈尊の精神であるといつてよいでしょう。その精神を受け継げば、結局世を離れたものでなくて世界そのものの、現実の王国をそのまま仏教的なものにしなければならぬというのが大乘經典でしょう。だから大乘經典は精神王国の普遍性であり、それは仏教精神による現実の世間の王国への指導性でしょう。これがつまり莊嚴仏国であります。大乘經典はこのようにして、聖者・凡夫の区別を撤廃したいとねがっていても、どうしても達成されないものがあつたわけです。」

ここに浄土教の出発点になるものがあるのであります。そこで彼岸の浄土というものができたのであります。その往生浄土でなければ一切衆生の救われる道がないのではないかと、成仏道より往生道へと転回してきたところに浄土教の意義があるのでしよう。その意義を明らかにすることができたのは、大無量寿經の懺興の述文賛による「上巻は如来浄土の因果を説き、下巻は衆生往生の因果を説く」（『教行信証』行巻・『註釈版聖典』一七四頁）という言葉であります。

その二種の因果のうちに「如来の因果」でなく「如来浄土の因果」といい、「衆生の因果」でなく「衆生往生の因果」という。その浄土という言葉を、往生という言葉で抜くと、如来の因果、衆生の因果となりますが、四聖諦で申せば、苦集の二諦は衆生の因果であり、滅道の二諦は如来の因果であるといつてよいでしょう。衆生の因果というと、すぐ悪因果を考えなければ、衆生の因果でも、善因果がありま

果であるようにと衆生にすすめたのが、苦集の二諦であるといつてよいでしょう。この二諦の中には悪因果が悲しまれているけれども、その裏に善因果も予想されているのでありましょう。しかし、如何に善因果であっても、要するに迷いがありますから、世間の因果であります。

これに対して、滅道は涅槃に至るところの道、それは如来の因果であります。この二つの区別をどうしても撤廃できなかったのですが、そこで「浄土」の因果・「往生」の因果となつたときに、二つの因果は裏表になつてきました。だから「如来浄土」の因果といつて、浄土と付け加えていうのは、衆生往生の因果を含んで「如来浄土の因果」というのであります。従つて、衆生往生の因果の根元を尋ねれば、ここに如来浄土の因果が存するのであります。そして如来浄土の因果の帰する処はどこにあるかといえば、衆生往生の因果であり、その源はどこにあるかという、如来浄土の因果といえるのであります。従つて衆生往生の因果が成立しなければ、如来浄土の因果は、意味をもたぬのであります。大無量寿經の二種の因果は、衆生往生に意味がある。

一体、如来は何のために浄土など建立されるのか、仏にとつては無用であります。仏はどこに在してもよいのだから、浄土を考える必要がないのに、何故考えねばならなかったかという、本来衆生のためであり、如来浄土の因果は、もともと衆生往生の因果を含んでいるからであります。

昨今次のようなことも思うのです。衆生往生の因果ということによつてのみ、仏教は普遍性

を得たのであると。それまでは、仏法は特別に偉い教えであつて、普遍的ではありません。仏道を修行してできたものは偉大なものであつても、決して普遍的なものではありませんでした。普遍性とは、衆生の往生浄土ということによつてのみ得られたのであります。往生浄土の教えがなければ、仏法には普遍性がないのでありましょう。

第十八願は、衆生往生せずば我も仏にならぬということであります。我々はそういう言葉だけを有難く頂いておつたのでありますが、これを言い換えれば、往生浄土の教えがなければ、成仏は成り立たぬということではないでしょうか。

第十八願を別の言葉で言い換えれば、衆生往生の道が開けない限りは、仏法は普遍性を有することではないのだということになるのではないのでしょうか。それでは、どうして浄土往生ができて、仏法は普遍性を持つことができるのでしょうか。大乘は一乗であるであろうが、大乘は小乗ではない、ということもいわねばならぬし、そして又同時に一乗であるということもいわねばならぬのです。即ち大乘と一乗という、この二つの要求がどこで一つになるかということも随分考えさせられることであります。その大乘が一乗でなければならぬならば、凡夫が救われるということこそが一乗道を明らかにすることであります。それには衆生往生せずば仏にならないということで、往生浄土の道がなければ、仏法にならないのだということですから。要するに、一切衆生の救われるところの道開けずんば、仏法は成り立たぬものと、第十八願というものを我々はどのように受取つて

いつてよいのではないのでしょうか。

そうすれば憬興の述文賛によつて、二種の因果の内的関係というようなことを申すにも、まず、第十八願そのものを、法然聖人はただ願うところは一つであるといわれます。その願うところは一つであるということは、仏法は一つであるということであります。仏法は唯一つだということをお明らかにするのが、往生浄土の教えであります。

往生浄土の教えあつて、始めて仏法唯一つといえるのであり、それが本當に人間の救われる道でもあります。人間によつて練り、修行して行くところの道でなく、あたえられたる本願一実の大道であり、唯この道を行くべしという大義は、往生浄土の教えに他ならないのです。

こういうことが、歴史的視野において見渡すときに、釈尊がこの世にられましたことの意義であり、終わりにあるものは始めにあつたのであつて、「如来所以興出世、唯説弥陀本願海」ということにもなるのであります。かくて歴史の底を流れて、あるいは、成仏の方便というところから出発し、あるいは、往生は易く、成仏は難しというように色々なところを通して、最終的に顕わされたところを見れば、要するに、仏法は本願を信じ念仏を申して浄土に生まれるということにおいてのみ、その普遍的性格が顕現され、出てきたのにちがいないと頂かれるのであります。

しかしその場合、そもそも浄土とは何か、浄土のあり場所、在り方、又往生とは如何なることをかを究めて行かねばなりません。それは次講において申したいと思ひます。

第二に話したいことは、「浄土のありか」ということです。それは浄土は一体どんなものかということにもなります。浄土を明らかにしたいということは、少し大袈裟な方ですが、私の生立ちからの問題であつて、大谷大学に就職した時にも、一体仏教の上に浄土はどのような説かれていたのかと、いろいろ探つてみたのであります。ところが多くの大乘の經典にも、浄土という言葉は出てくるのであります。そこで出てくる浄土は、浄仏国土ということになります。

仏国土を浄めるという語から、仏国の二字を略して浄土というのであります。仏国という言葉が用いてあるから、仏国が浄土であるといいたいところですが、仏国というも、唯国土といふからといって、必ずしも浄土であるとはいえないのであります。

たとえ穢土であつても仏国であり、娑婆世界は釈迦仏の国土であるというようなことであります。一つの世界は一つの仏国であります。このように用いられてありますから、浄仏国土というてあつても、浄国土というのと同じであります。

しかし、更に国土を略して土という、その土というのは、業感の世界というものであります。国土は人間業の感ずるところであります。我々の身体は直接に業感であり、どういう業を造つたかということによつて、どういう体感するかということになります。業によつて感あり、感によつて業を造るということであつて、それがやがて、業と身体の関係ということにもなりましょうか。不養生という業により病

身を感じるのですし、善いことをすれば、幸福を感じるような身になれるのであります。このように「身」は業によって直接感じられるものであります。この身を介して感ぜられるのが「土」でありまして、土すなわち、我々の目に触れ、耳にきこえる業感の世界であります。業感の世界とは、要するに肉体を感じられるところであります。この身において、寒さを感じるのは、私の身がそう感じるものであり、そしてその肉体を介して寒いなあと感ずるのであって、かくして各々の業感、人おのおのの世界というものができてくるのであります。

この業感の世界を浄めてゆこう、純化してゆこうということは、たとえば、我々の肉体が健全になれば我々の世界は住みよくなります。即ち我々の業を浄めさえすればいつでも幸せを感じずるような世界に住むことができるということであって、これが浄土という語の意味であります。多くの大乘經典に浄土という文字がありますが、多くはこのような浄仏国土という意味であります。これは前講に申した聖人、賢人、もつと広くいえば、菩薩の精神において流れているものであります。このような考えの一番はつきりしているのは、大般若経であり、その終りの方に「浄仏国土品」があります。この浄仏国土品を龍樹が解釈して浄仏国土はどうしたら出来るか、それは要するに身口意の三業を浄めることであるといっています。これが浄土ということですが、観経にも浄業という言葉がありますが、浄土とは浄業であり、浄業のあるところ浄土ありということです。

般若経で、どうして三業をきよめることができるか、浄土ということができるといふと、

「自他内外の因縁に依る」というてあります。自分と他人とが因縁をなしているものであって、いかに自力であるといっても、他人の世話にならずに自分の生活は成り立たないのです。内外とは、内なるものは身、外なるものは土ということ、その自他内外の因縁によって、ここに国土があるのでありますから、それを自己に収めてくれば、自分の身口意の三業を浄めること自体が、そのまま他を浄める事にもなり土を浄めて行くことにもなるのであります。このように説いている般若経は、更にその例が面白いのです。例えば、我々の業が曲がっていると道路も曲る、我々の心がゆがんでいっていると道路がゆがむ、と例挙していますが、これは案外に現実的であるように思います。立派な道路ができた、暫くするとどこか陥没する、そんな筈がないのだが、多分これを請負った人の心がゆがんでいたのであると。だから、自然の物理的因果と、人間の道德的因果とは別なものだと思ふけれども、別といえれば別であるが、たとえば震災で多くの人が死んだ、それはみな先の世の業だといふのは少し無理であって地震はそれ自体依つてくるところがあるのであります。業ということをそういう具合に使うべきではないのです。だから事物の因果と、人間の道德的因果とは別であるということも、決して忘れてはならぬことでもあります。

しかし、二つの因果が無関係であるということも、そう簡単にはいえません。もう少し政治を執る人々が、仕事を請負う人が正直でありさえすれば、争いもなく、道が曲つたということもないのでしょうか。こういうことをいおうとしているのが、龍樹菩薩の浄仏国土品の註釈の意

味でありましょう。

これでもわかるように、大乘經典の浄土というものは、要するに一つの理想目であって、それを仏教の世間化といつてもよい。本来が世間から離れてゆこうとした出世間の仏教が、世間をとり入れ、やがて世間化して行かなければ、大乘道というものは成立たないということが、大乘仏教の大きな問題であると思います。大乘經典のことを思いだすと、いつでもこの経を、国王、大臣に付属するという言葉が多くてくるのであります。大乘精神であるから、普賢とか文殊とかいう方に付属するというのは当然でありましょうが、しかし、そもそも文殊、普賢というのは何者でありましょうか。文殊とは空理でありましょう。因縁所生法我説即是空という、縁起、空理に達するのが文殊でありましょう。その空は無所得だから、物にはとらえられぬ、とらえられぬその智慧をもって世間を觀ずれば、世間出世間又空であり、そこに普賢があるのです。普く賢しで、賢きものは出世間の道人だけでなく、世間の生活も、文殊の智慧を得れば、皆普賢であるということでありましょうか。

ともあれ仏教の原始精神からいえば、余り女性に近づいてはならぬし、殊に国王などに交際をすることなどは避けよということであったのに、大乘經典では、女性を尊び、国王長者を尚んでおるところに、大乘精神というものはあるのであります。

華嚴經入法界品というものがあります。なかなかむつかしい經典であります。入法界品で善財童子が訪ねて歩く五十三の善知識というものをみると、女性と長者とが非常に重要な位置

におかれていることは、殊に注意すべきことであります。

あります。大乘精神の普及ということに関しては、女性と長者でなければ本當に普賢道というものは成立たないし、真に淨仏国土ということではないということでありましょう。何遍読んでみても、華嚴經に出てくる女性は、余りに立派で、こんなに心も身体も美しい婦人があるのかという気がします。阿含の經典には、大蛇を見るときも女人を見るなというような言葉もどこかに出ていたように思うし、木の柱を抱いても女人を抱いてはならぬ、といったように、障りの多いものとして思うと思いますが、華嚴經にでてくる女性は、ただその姿を見ているだけで、自ら仏法に適うような女性であり、あまりにも綺麗であります。長者の方も又長者でなければ、本當に布施の行はできないのでありますから、長者は良いものですが、余りにも綺麗な長者ばかりでているのであります。しかし、淨仏国土ということからいうならば、美しい人ばかりで当然なことでありましょう。

しかし、その淨仏国土といつて目指された淨土とは如何なるものでしょうか。それは、先ほど申したような、仏法の世間化ではないでしょうか。大乘の經典は勿論、仏教を世間化するということにおいて、世間を仏教化してゆこうということに違いありません。しかし、事實は仏教の世間化にのみ終つてしまつて、世間の仏教化は容易にできなかったというところに、大乘仏教に残された問題があるのでありましょう。

かように大乘仏教で考えられた淨土は、あくまでもこの世を淨土にすることではなくてはならぬのです。この世の外に、別にあの世というように考えられた淨土ではないということは明らかであります。

維摩經に「直心は是れ菩薩の淨土なり。菩薩成仏の時、不諂の衆生十方より來生す」という言葉があります。これは直心すなわち至誠心、まことの心であり、それが菩薩の淨土であるといふのであります。淨土というのは要するに菩薩精神であり、菩薩精神のほかに淨土はないのであります。だから菩薩成仏の時、諂らざる正直な衆生は、十方より來生すといつてあります。來生といつて往生の語を用いていないのは、單に「あつまる」という意味に解してよいでありましょう。だから、菩薩の淨仏国土の修行ができれば、そこへ正直な衆生が集まつてきて、自ら淨土ができるのであります。かくして大乘精神界は、この世を淨土にするのであります。淨土へ行くのではなく、本來的には純粹な姿においては、娑婆即寂光淨土でありますから、娑婆の生活を淨化してゆけば、そこに淨土ができるのであります。どこまでも、成仏道を願う人の淨土は、この世的なものであるといつてよいのであります。

仏教的な「尊嚴」の解釈①

『生死の仏教学「人間の尊嚴」とその応用』

木村文輝氏著

(一)「人格」と「生命」の非存在

人間にとつての尊嚴とは何か。仏教的立場からこの問題を考究するにあたり、まずは従来の固定觀念を打ち壊すことから始めよう。そのための手がかりとなるのが「空」と「縁起」の思想である。あえて一言でまとめれば、「空」とは、あらゆるもののの中に固定的な実体の存在を

認めないという思想である。一方、「縁起」とは、そのような実体を伴わないすべてのものは、常に一定の姿で留まることができず、他者との相互關係によつて絶えず変化していくという思想である。したがって、「空」と「縁起」の思想は、互いに表裏一体の關係にあると言ふことができるのである。

さて、キリスト教やその影響下にある西洋の諸思想では、いづれも人間の生命の拠り所として人格の存在を説いてきた。しかも、この人格をどのように理解する場合でも、人格は常に「存在するもの」として実体的に捉えられてきた。

これに對して、仏教は本來的に「空」、もしくは「無我」の原則を標榜している。これは自我の本質ともいふべき実体的なアトマン(我)の存在を認めない立場である。しかも、仏教の思想に従えば、人間の色、受、想、行、識の五蘊、もしくは、地、水、火、風の四大が仮に結びつくこと(仮和合)で成立しているに過ぎない。それ故、人間の中に人格という実体的なものを想定することはできないのである。

そうだとすれば、身体と人格とが結びついた時に人間の生命は成立するという考え方は、仏教では認められないことになる。のみならず、生命を実体的に捉える視点もそこでは成り立たない。そもそも生命というものが人間の身体から離れて單獨で存在しているわけではないし、具体的に何らかの形をもつて成立しているわけでもない。生命は「空」なる存在なのである。この点は、人間の生命の本源を神の息という還元し得るキリスト教とは根本的に立場を異にしている。

あえて極言すれば、仏教において「生命」は存在しない。あるのはただ、そこに一人の人間が「生きている」という事実。あるいは、生命現象を伴う人間が存在するという事実である。人々はその事実を仮に説明（仮説）するために、比喩的に「生命がある」という表現を用いているにすぎない。したがって、そのような修辭に惑わされて実体としての「生命」の存在を主張することは、仏教の基本的な立場から逸脱していると言わざるを得ないのである。

そして、これと同じことは「死」についてもあてはまる。「死」という言葉は、人間の身体から生命現象が失われたことを仮に説明（仮説）するために用いられた修辭である。もちろん、ある人が今「死につつまある」という現象や、生命現象を失った「死体」、あるいはその死体に対する医学的判定としての「死亡」という事態は存在する。けれども、生命の場合と同様に、「死」が人間の身体から離れて単独で存在することや、具体的な形をもつて存在することとはあり得ない。この点でも、「死」を死神と重ね合わせて実体視し、斧をもった骸骨がその具体的イメージとして広く流布した西洋の伝統とは一線を画していると言えるだろう。

このように、仏教思想においては「生」と「死」のいずれもが、単独で存在し得る実体的なものではなかった。それ故に、生と死を截然と区分することは不可能である。むしろ、生と死は一体のものであり、一人の人間が変化していき一連の過程である。人々は、それまで「生きている」と認められていた一人の人間が、次第に生命現象を失っていくことを「死につつまある」と表現する。やがて、その者の死亡判定が

医師によって行われたとしても、それは医学や法学という特定分野においてのみ意味をもつ「死亡」の確認に過ぎない。そのような判定が下された後も、人々はその「死体」の変化を窺い、その中に生命現象の残存、もしくはその完全な消失を見届けようと努力する。こうした作業は「死体」が火葬されることで、あらゆる生命現象が根絶するまで続けられるのである。したがって、ある人間の生から死への移行は、緩慢に進むというのが人々の直感的な把握である。そうだとすれば、生命の有無を時間軸上の

それ故、仏教では人間が「生きている」限りにおいて有効な「生命の尊厳」を積極的に説くことはできない。なぜならば、脳の機能の不可逆的な停止や、心拍と呼吸の停止等は、あくまで「死につつまある」者の一つの通過点に過ぎないのであり、そうした特定の時点で「生命の尊厳」の消滅を宣言することはできないからである。のみならず、「生命」が実体として存在することを認めない仏教の立場では、それに依拠する「生命の尊厳」の存在を認めること自体が、論理的に不可能である。

とは言え、人間が「生きている」ということを、仏教が尊重しないわけではまったくない。それどころか、仏教では「人身受け難し」と表し、人間として生まれることの「かけがえのないさ」を説いている。また、大海を泳ぐ目の見えない亀が水面に顔を出した時、偶然そこには漂っていた浮木の穴に頭を入れてしまうことは極めて稀なことだという「盲亀浮木」の譬えを用いて、人間として生まれることの希少性を

語っている。このように、仏教において人間の存在を「かけがえのないもの」と説くのは、決して人間が人格を保持しているからではない。そうではなくて、人間として生まれ、生き続けるための諸条件が整うことの難しさ、「有り難さ」の故である。そして、この考え方から導かれるのは、人間としての「生命の尊厳（神聖性）」ではなく、「人間の尊厳」である。つまり、仏教的観点に立つ場合、問題となるのは「人間の尊厳」であって「生命の尊厳」ではないと言うことができるのである。

さらに、仏教的な立場においては、この「人間の尊厳」が人間のどの部分に宿るのかという設問も意味をなさない。と言うのも、西洋の思想は人格の存在を認め、それを人間の精神と一体視することによって、「人間の尊厳」の座位を脳に求めた。けれども、仏教では人格の存在を否定する。のみならず、身心一如を説く仏教の立場にもとづけば、人間を身体と精神（心）とに分けて考える態度は否定される。まして、人間の身体を脳と他の部分とに分けて、そのいずれに「人間の尊厳」が宿るのかと問うことは、明らかに的外れな議論とならざるを得ないからである。

仮に、仏教的な観点を離れてみても、脳が身体他の部分から切り離されたまま単独で機能することはあり得ない。反対に、脳の機能を持った状態で、身体他の部分が生命活動を持続することは基本的には不可能である。このように、脳と身体内の他の部分は相互に依存し合う関係、言い換えれば縁起の理法によって成り立っている。どちらか一方を欠いても、人間と

稱讃寺三月行事予定

六日(水)

のんのん法話会
午後二時～午後四時

一六日(土)

のんのん法話会
午後二時～午後四時

一七日(日)

春季彼岸会法要
午後二時～午後四時

二六日(火)

のんのん法話会
午後二時～午後四時

たの とき えがお そだ
楽しい時に笑顔が育ち

くる とき こころ そだ
苦しい時に心が育ち

二〇二四年「心のともしび」三月カレンダーより

能登半島地震への義援金送付方法について

本願寺 名称 浄土真宗本願寺派たすけあい運動募金「令和六年能登半島地震 災害義援金」
郵便振替 〇1000-4-69957 加入者名 たすけあい募金
銀行振込 ゆうちょ銀行 店名一〇九(イチゼロキュウ) 当座0059957
名義 たすけあい募金

〈石川県〉

銀行 北國銀行 県庁支店 口座番号 普通 28593

口座名義 石川県令和6年能登半島地震災害義援金

(イシカワケンレイワロクネンノトハントウジシンサイガイギエンキン)

ゆうちょ銀行 口座番号00100-8-452361

加入者名 石川県令和6年能登半島地震災害義援金

(イシカワケンレイワロクネンノトハントウジシンサイガイギエンキン)

日本赤十字社石川県支部

銀行 北國銀行 県庁支店 口座番号 普通 28580

口座名義 日本赤十字社石川県支部 支部長 馳 浩(ハセ ヒロシ)

編集後記(愚案)

しての生命活動を維持することはできないのである。それ故、人間存在を考える上で、脳と他の部分のいずれかを特に重視する視点は無意味であり、そのいずれの側に「人間の尊厳」が付随するのかという質問は、この点からも成立しないのである。

したがって、仏教の説く「人間の尊厳」は、人間存在の全体に関わるものだと言うことができる。さらに、それは一人の人間の中で完結するものではなく、周囲とのつながりを通して現れてくるものでもある。この点を次に考察することにしよう。

(次号に続く)

ご門徒さんのFさんが、昨年の暮れ、外出先から病院に緊急搬送されました。私が、それを知り得たのは、ひと月以上経った、二月十日の夜でした。翌日、お見舞いに参ったのですが、顔を合わすなり、「おおー」と言ってくださるのかと期待しましたが、声が聞えているかどうかとも判断がつかません。このことをFさんのお兄さんお姉さんに一刻も早くお知らせしたく、病院側に掛け合いました。が、「個人情報保護」で何も話してくれません。ソーシャルワーカーにいたっては、生活保護の申請をしており、戸籍から出身が分かる？と言っていました。ソーシャルワーカーがまずやることは何！。Fさんの携帯(電源は切れているでしょうが)、家のドア鍵もあるはずなのに？ソーシャルワーカーの窓口には「患者さん・地域の支援」と掲げてありました。「保護法」は大事なことですが、逆に孤立を助長する結果にもなっていないだろうか。三月二日、お見舞いに参りましたら、既にFさんは転医させられていました。今どこに？お身内との連絡はついたのだろうか？